

住経験が住宅の設計および居住後評価に与える影響 その2

－施主を対象とした Web アンケート調査：住経験に対する意識－

			正会員	小森 幸*
			同	柳沢 究**
			同	○服部 正子***
住経験	住宅設計	居住後評価	同	彌重 功***
記憶	要望	情報源	同	井上 泰地****

1. 背景と目的

「住まいとそこでの生活にまつわる経験」^{文1)}を住経験という。筆者らは、住環境の更新局面において住み手の判断を左右する情報源のひとつとして住経験に着目し、設計および居住後評価への影響を明らかにすることを目的とした研究を行ってきた。前報では、新しい住まいの設計時に施主から提示される要望に着目した分析によって、施主が考慮する住経験の内容の多様性や住経験を意識して実現した要望の居住後評価が高いことを明らかにした。一方で、設計時に重視した5要素に関する要望における住経験の考慮の程度には偏りがみられた。

本報では、施主自身による把握が困難な可能性がある具体的な要望の背景としての影響に留まらず、総合的にみた住経験の影響の実感の有無に注目し、住まいの評価との関連や住経験活用の課題について分析する。

なお、本報の分析^{注1)}には、注文住宅の施主を対象とした前報の Web アンケート調査で得られた回答を用いている。

2. 住経験の影響の実感

現在の住まいの設計に関与する際に自身の過去の住まいの影響を受けたと感じるかを尋ねた結果を図1に示す。「直近・子どもの頃・その他」のいずれの時期の住まいについても、5割を超える人が影響を実感している。

3. 住まいの評価との関連

前報で算出した住経験参照度 $[x]$ ^{注2)}を「 $x=0\%$ 」、「 $0\%<x$ 」の2段階に統合し、肯定・否定の2段階に統合した住まいの評価とのクロス集計および独立性のカイ二乗検定を行ったところ、5%水準で有意な結果はみられなかった。住経験の参照の有無に関わらず住まいの評価は大きくは変わらない。

続いて、「直近・子どもの頃・その他」のそれぞれの時期の自身の住まいについて、設計時の影響の実感と住まいの評価を肯定・否定の2段階に統合し、クロス集計と独立性のカイ二乗検定を行った結果を図2に示す。影響を実感している人の方が、肯定的な評価をした人の割合が高く、5%水準で有意な結果も複数みられたことから、設計

時に住経験の影響を受けることが実現した住まいの評価を高める可能性が示唆された。

4. 住経験の影響の実感と住経験参照度の乖離

「直近・子どもの頃・その他」のそれぞれの時期の自身の住まいについて、設計時の影響の実感を肯定・否定の2段階に統合し、「 $x=0\%$ 」、「 $0\%<x$ 」の2段階に統合した住経験参照度とのクロス集計を行った結果を図3に示す。

いずれの時期の住まいについても設計時の住経験の影響を実感している人の方が「 $0\%<x$ 」の人の割合は高いものの、設計時に住経験の影響を実感しているにも関わらず「 $x=0\%$ 」の人の割合は7割を超えており、住経験の影響の実感と住経験参照度には乖離がみられる。

住経験参照度を算出する際に用いた「重視した要素に関する要望」と「住経験が強く影響する要望」が一致していない可能性も考えられるが、施主が自身の住経験を情報源として具体的な検討に活用する上で何らかの課題があり、そのことが住経験と要望との対応関係を曖昧にしたり、自覚的に参照される住経験を前報で扱った、気に入っていた点・気に入らなかった点といった特に印象的だった内容に限定したりしている可能性も考えられる。

5. 住経験に対する意識と活用の課題

住経験に対する意識は、設計時の振り返りが有意だと感じる人が「直近・子どもの頃・その他」のいずれの時期の住まいについても7割を超えていた(図4)。

一方で、住経験に対する意識を肯定・否定の2段階に統合し、「 $x=0\%$ 」、「 $0\%<x$ 」の2段階に統合した住経験参照度とのクロス集計を行ったところ、振り返りの難しさや打合せなどで語ることへの抵抗を感じる人のうち、「 $x=0\%$ 」の人の割合は8割を超えていた(図5)。このことから、施主自身が住経験を活用する上で振り返りの難しさや開示の抵抗感が課題となっていると考えられる。

6. まとめ

設計時に住経験の影響を受けることで実現した住まいの評価が高まる可能性があり、施主は設計時に自身の住経験を振り返ることの有意さある程度認知している。

住経験の更なる活用に向けて、振り返りの難しさや開示の抵抗感といった課題の克服が求められる。

注釈

[1]集計・分析では小数点第2位を四捨五入し、第1位までの表記とする。ただし、p値については小数点第4位を四捨五入し、第3位までの表記とする。株式会社クロス・マーケティングによると独立性のカイニ乗検定に用いたCrossFinder2では2×2のクロス表の検定において、「サンプル数<20の場合」と「20≦サンプル数<40かつ期待度数の最小値<5の場合」を除く状況で、イエーツの補正が行われる。

[2]前報と同様に住経験参照度を分析に用いる際の有効回答は367名分となる。

主要参考文献

[1]柳沢究・水島あかね・池尻隆史：住経験インタビューのすすめ、西山卯三記念 すまい・まちづくり文庫, p. 2, 2019

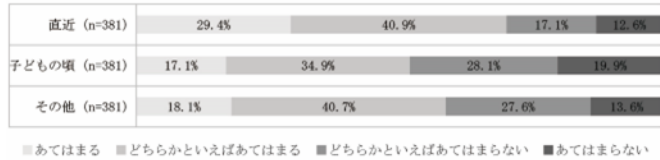


図1 設計時の住経験の影響の実感

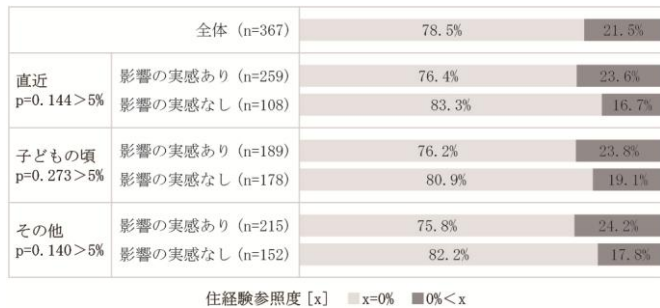


図3 設計時の住経験の影響の実感と住経験参照度

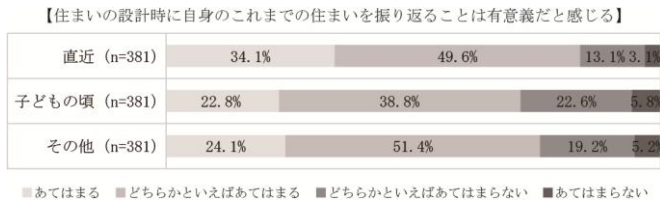


図4 住経験に対する意識



図5 住経験に対する意識と住経験参照度

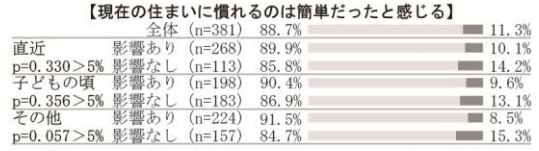
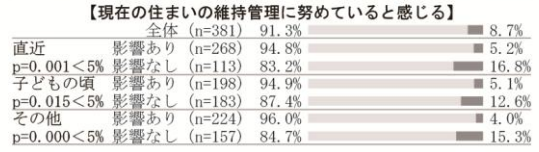
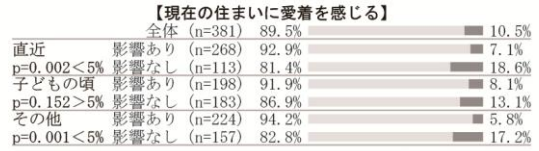
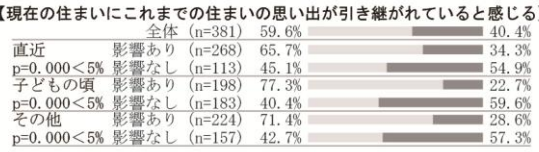
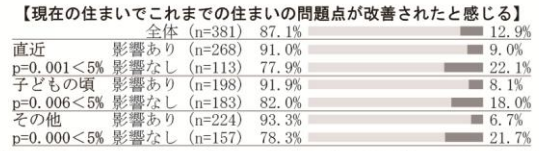
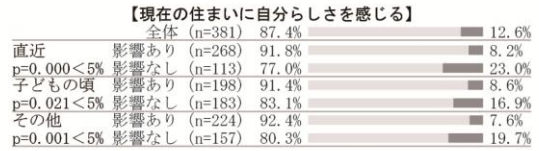
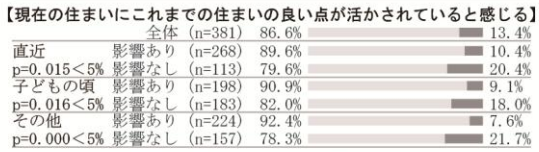
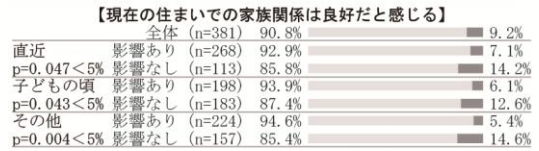
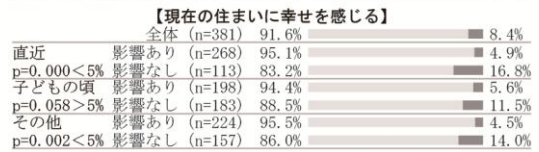
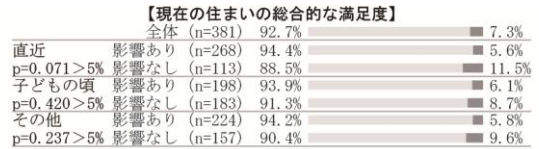


図2 設計時の住経験の影響の実感と住まひの評価

*京都大学大学院 工学研究科 修士課程
 **京都大学大学院 工学研究科 准教授・博士 (工学)
 ***積水ハウス株式会社 総合住宅研究所
 ****積水ハウス株式会社 しあわせ住まひ研究所

* Graduate Student, Graduate School of Eng., Kyoto Univ.
 ** Assoc. Prof., Graduate School of Eng., Kyoto Univ., Dr. Eng.
 *** Comprehensive Housing Life R&D Institute, Sekisui House, LTD.
 **** SHIAWASE SUMAI Institute, Sekisui House, LTD.